

キーワードは

「つながっていく生命」・「人と人とのつながり」

～川之江ワン&オンリーの会の活動を通して～

今月は前回号に引き続き、1月18日に開催された人権・同和教育研究会社会教育部で実践発表をくださった、川之江ワン&オンリーの会 脇美代さんの報告を紹介します。



私たちの活動は、母体である生命尊重センターの活動から始

まりました。生命尊重センターとは、ノーベル平和賞受賞者のマザーテレサが昭和57年に来日されたときに、「世界の平和は、お腹の赤ちゃんを守るところから」という呼びかけに心を打たれ、立ち上がった会です。

そして昭和59年、日本で唯一のお腹の赤ちゃんを守る月刊誌「生命尊重ニュース」が創刊され、生命尊重活動が始まりました。毎月、色々な方が専門的見地から、「いのちの情報」を発信してください。

私がこの活動を始めるきっかけとなったのも、この『生命尊重ニュース』との出会いからです。私は、思春期の頃、自分の存在価値に悩み、死を意識することもありました。社会人になっても心の傷は癒えることな

く、悩み続けていました。

そんな時、職場で出会った先輩から『生命尊重ニュース』の冊子を紹介されました。その冊子を毎月読み続けていくうちに、少しずつ悩みが解消されていき、欠点があるなしに関わらず自分は価値ある人間だという自尊心をもてるようになり、気持ちも徐々に明るくなっていきました。

その後結婚し、2児の母となり、子育ての中でもいろいろな悩みがありました。生命尊重ニュースから学んだ「子どもは授かりもので、親の所有物ではない」という考え方を柱にして、子どもに接していきました。

子どもが通う幼稚園では、子育て座談会が開かれ、悩みを話し合ったり、学び合ったり、お母さん同士が交流し合う安心の場がありました。

しかし、そういう機会に恵まれていない保護者も多く、それなら自分たちで子育ての孤立を防ぐための交流の場を作ろうと、

援をしています。

その円ブリオ基金は、平成7年の阪神淡路大震災の時に6人の赤ちゃんを妊婦さんを応援し、支援活動を開始しました。東日本大震災では78名、熊本地震では27名の妊婦さんを支援させていただきました。国よりも早い対応に感謝しています。など、お礼のお手紙を多数いただいています。

昨年度、NPO法人円ブリオ基金センターへの妊娠SOSの相談件数は198件、支援件数54件、現在全国で834名の赤ちゃんを支援させて頂いております。コロナ禍の中、妊婦さん本人の失業や夫の減収等で困窮した相談が、円ブリオ基金センターに多数入ってきています。

コロナ禍で大変な時にも赤ちゃんは生まれてきます。それは希望であると同時に、そんな事態であるからの困難もまた現実なものです。

今日の社会の状況として、「いのち」が軽視されていることが

まず知り合いから声をかけ集まるようになり、平成13年に川之江ワン&オンリーの会として活動を始めました。

「ワン&オンリー」とは、かけがえのないたった一つのという意味です。

現在、毎月第4日曜日に川之江隣保館で子育てのこと、家族のこと、「いのち」についてじっくりばらんに話をしたり、講師を招いて座談会をしたりと、それぞれの思いを共有し合っています。



多くあります。

障がいのある方も、認知症の高齢者も、お腹の赤ちゃんも、コミュニケーションできるかどうか、役に立つか立たないかに関わらず、誰もが命の存在そのものに価値があることを認められ、社会の大切な一員として尊重される心豊かな社会へと向かっていってほしいと願っています。

そのために、このお腹の赤ちゃんの命を守る活動は欠かせない活動だと思えます。この活動を通して、これからの未来を担う若い人たちにも命を大切にすることを伝えていきます。

キーワードは、生命とつながり。それは「つながっていく生命」と「人と人とのつながり」を表した言葉です。

脇さんたちの活動は、何か大きなことをするという打ち上げ花火的なものではなく、生命がずっとつながっていくように、普段の生活の中にある困りごとや悩みに丁寧に向き合いながらつながっていきます。

なぜ、川之江隣保館を利用させていただいているかというと、私は小・中・高とPTA人権・同和教育部長をさせていただきながら、隣保館で行われているさまざまな学習会にも参加していました。そんな学習を積み重ねていく中で、ワン&オンリーの大事にしていることと、人権・同和教育の目指すものが、「どの人の命も同じ命の重さで尊ばれる」ということとつながっていると実感できました。人権・同和教育を大切な教育と捉えられたから、何のためらいもなく関わり続けてこられたのだと思います。川之江隣保館は、私にとって、人権を考える拠点であり、人と人がつながり合う大切な場所です。これからもつながっていきたいと思います。

会の参加者には、不登校になつていた子どもさんのお母さんがいました。悩みを打ち明け、聴き留めてもらい、同じ経験をされた方からのアドバイスなどで、お母さん自身が元気になり、